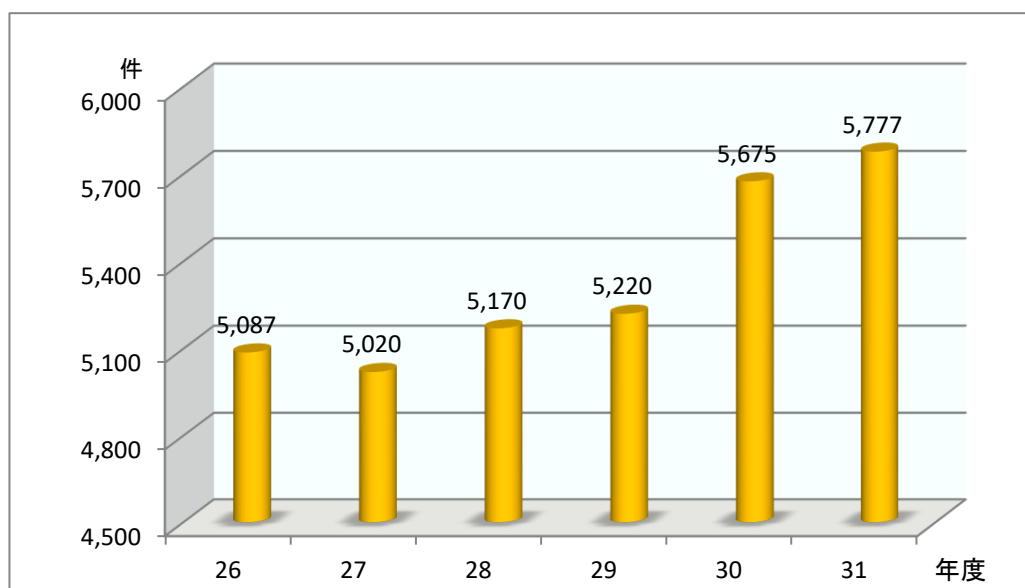


17 病理組織診断件数

解説

大学病院は高度な治療を行うだけでなく、その前提となる診断が適切になされることが肝要であり、正確な診断にも同じ重きを置いています。正確な診断の最終根拠として、病理診断が要であるが、診療全体の中で病理診断が必要となる状況がどの程度あるかを示す指標です。

実績



自己点検評価

病理医の日常業務の中心である病理組織診断では、患者さんに直接お会いすることはありませんが、病気の確定診断であるばかりでなく、適切な治療法（薬剤、手術、放射線など）の選択のためにも欠かせません。腫瘍の場合は良悪性や種類のみではなく、進展範囲の評価や細胞の特性を組織学的に調べることは最新の治療法選択に不可欠です。腫瘍の他にも感染症やその他の炎症、自己免疫性疾患、移植、循環障害、代謝性疾患などにも病理診断は欠かせません。正しい病理診断はより適切な治療の第一歩であり、病理組織診断件数の増加は医療が適切に行われていることの証でもあります。

定義

対象年度1年間の医科診療報酬点数表における、「N000 病理組織標本作製(T-M)」および「N003 術中迅速病理組織標本作製(T-M/OP)」の算定件数。
入院と外来の合計として、細胞診は含めません。

算式

実数